

花 き

異常天候早期警戒情報が4月27日に新潟地方気象台から発表され、5月2日頃からの1週間は気温が平年よりかなり高くなる確率が30%以上と見込まれるため、農作物の管理に十分注意する。

実 況

1 キ ク

3月、4月上旬は寒い日と暖かい日が交互に推移した後に、比較的低温の影響で生育はばらつきがあった。4月中旬以降からは比較的天気が高く、8月咲作型の定植が行われるようになった。苗は老化気味で活着は停滞気味であった。

あわら市では暮れ植えギクの芽立ちの品種間差があり、「川風」「清風」で悪い。春植えギクの定植は4月21日頃から開始された。

奥越地区の秋植え夏ギクの芽立ちは品種間差があり、「小鈴」「シューペガス」等は出芽が遅い。春植えギクは、4月25日頃から定植が始まった(昨年4月21日調査)。和泉の暮れ植えギクは圃場に積雪が40cm程度あり、芽立ちは遅れる見込み。病害虫では、ハモグリバエの食害痕が4月24日頃より確認された。上庄地区の一部にネキリムシ、親株ハウスにアザミウマ類、アブラムシ類が見られる

福井地区では、4月22日調査で4月16日～21日かけて定植された「小鈴」「翁丸」「小雨」が草丈10～12cmで昨年より生育はばらつき、摘心作業は4月22日から行われ、遅れ気味である。福井市南部の春植えギクの定植は4月16～22日にかけて行われた。一部の苗にアブラムシの発生がみられた。

丹生地区では、4月22日調査で4月13～16日から定植が開始された。品種は「小鈴」「小雨」「翁丸」「花絵」「恋心」等である。3月19～28日に挿し芽、4月22～24日にピンチした。側枝が出ておらず(昨年2mm)、徒長気味である(昨年4月22日調査)。一部にアブラムシが発生しており、白さび病、黒斑病、褐斑病が微発である。

越前市では、4月22日調査で8月咲きの「はじめ」「翁丸」「やよい」が4月1日に挿し芽し(昨年3月24～28日)、4月14～15日に定植した。草丈は10cm(昨年10cm)で、低温の影響は若干あるが早い品種でピンチを4月21日から開始した(昨年4月21日調査)。病害虫は、黒斑病、褐斑病の発生がみられた。

二州地区では、8月咲き小ギクが圃場準備が進まず遅れているが、4月下旬からピンチ苗を定植する予定である。

若狭地区では、8月咲き「くれない」「さきかぜ」「翁丸」等が、4月18日から定植されている。暮れ植えギクは、「はるき」「さきかぜ」「やよい」「サマーゴールド」の芽立ちがやや悪い。「はなふさ」が23.6cm、「とび丸」が22.8cm、「はじめ」が23.4cmで、病害虫はアブラムシ類が初発、アザミウマ類の被害痕、ハモグリバエ類の吸汁痕が4月8日に見られたが微発である。

2 ユ リ

奥越の1月下旬播種のシンテッポウユリ「オーガスタ」は、4月13日に苗が配布された。定植は4月15日から始まり、和泉地区は4月下旬に約1万3千本を植付予定。

LAユリの県育成品種「福井ユリ」は、福井市、春江、鯖江で半促成・季咲き栽培が

約 10,000 球(昨年 18,000 球)作付けされている。

LAユリの「リリブライトレッド」は、4月16日調査で永平寺の12月中～下旬定植もので草丈55～75cm(25cm)であった。冷蔵処理後の10月上旬定植「レッド」は、草丈98cm(90cm)で4月上旬から開花している。南越では4月16日調査で据え置き栽培が50cm(65cm)。アブラムシが小発生(昨年4月15日調査)。

春江では、11月30日定植の「リリブライトレッド」は4月22日調査で草丈91cm、56枚、花蕾数3～6であった。病害虫はアブラムシ、葉枯病が少発。福井ユリの目揃え会は、4月17日に開催した。3月30日定植の「カサブランカ」は草丈26cm、19枚。9月8日定植の「ブラックアウト」は草丈29cmであった。

3 トルコギキョウ

あわら市では抑制栽培の切り下株の草丈が7～13cmである。日照不足のためやや生育が悪い。

大野市では、購入苗の定植が4月下旬に行われる予定。

越前市では、4月22日調査で2度切り「ボヤージュグリーン」「一番星」の5月～6月上旬咲き作型は草丈17cm(22cm)、本葉8対(11対)で昨年より遅れている(昨年4月18日調査)。4月22日に定植された8月咲きの「モレットマリン」「ブライダルスノー」「ボヤージュグリーン」「オウブカクテル」は葉数3対、草丈3cmである。

二州地区では、4月17日調査で12月上旬播種の「ピンクシルエット」「なみだ」等が4月18日から定植されている。美浜町では3月下旬に「ロジーナピンク」「カルメンルージュ」等が播種され、本葉1対目が出始めている。

若狭地区では、4月21日調査(昨年4月18日調査)で3月上旬に播種された「フルフル」シリーズ等は本葉1対目が展開している。

4 ヒマワリ

あわら市で母の日出荷狙いのヒマワリが作付され、草丈60cm前後である。

福井市南部のヒマワリは、4月16日調査で3月27日に播種された「サンリッチオレンジ65」が草丈3～5cmであった(昨年4月22日調査)。

永平寺のヒマワリは、4月16日調査で2月下旬に播種されたサンリッチシリーズとピンセントシリーズで草丈が20(15)cmとなっている(昨年4月15日調査)。

5 シャクヤク

大野のシャクヤクは「華燭の典」が芽立数9.8本、草丈48cm、「サラベルナール」が19本、32cmと昨年よりやや生育が遅い。

6 スイセン

圃場の一部に斑点病の発生がみられた。各地で冬季のシカ食害がみられた。

対 策

1 キクの管理

1) 夏秋ギクのエスレル処理による開花抑制

(1) 7月咲き輪ギク品種の「スーパーイエロー」や小ギク「小雨」「夏ひかり」「夕立」で実用性が高く、摘心後1～2回のエスレル10を処理することにより、開花の抑制と切り花品

質を向上させることができる。品種、作型により開花抑制の効果に差異があるので、注意する。

(2) エスレル10処理の時期は、摘心直後に1回目の処理を行い、2回目は14日後に柔らかい茎葉を中心に全面散布する。ただし、同一品種の開花ピークをずらす場合は、2回目10日後処理と14日後処理を畝別に行う。

(3) 高温に遭遇していた苗や老化苗は、エスレル10の効果が低くなる場合があるので注意する。

(4) エスレル10の散布方法は、水道水やきれいな水で500倍に希釈する。散布時期は夕方がよく、葉先から少ししたたり落ちる程度に全面散布する。

(5) 調整した薬剤はその日のうちに使用し、他の薬剤（農薬等）との混用は避ける。

(6) 異常気象時（高温、低温、多雨、乾燥など）には効果が不安定なので注意する。また散布12時間以内に降雨のない条件で散布する。

表1 エスレル10の散布方法

薬名	対象作物	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
エスレル10	キク	500～1,000倍	摘芯時または定植後1週間以内及びその後10～14日毎	<ul style="list-style-type: none"> ・全面散布（株全体がぬれる程度）使用回数3回以内。 ・早期不時発蕾防止。
	キク（電照栽培）	500倍	親株摘芯時	

2) ハモグリバエの防除

(1) ハモグリバエの防除

ハモグリバエは5月まではナモグリバエ、6月以降に発生する種はマメハモグリバエと優占種が遷移するため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。殺卵効果のあるダントツ水溶剤が有効と考えられる。ただし、使用方法が異なり、ダントツ水溶剤ではナモグリバエは10 /m²土壤灌注、ハモグリバエ類では100～3000 /10a散布する。ハモグリバエの幼虫が入った葉は二次発生と細菌感染の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。できるだけ落とした下葉も圃場から除去する。

2 福井ユリの収穫までの管理

(1) 花蕾がのぞいてからは切り花をかたくするため、徐々に灌水を控えるようにするが、極端に灌水を控えると、葉やけの原因となるため注意する（これまでの灌水間隔が毎日なら、週3回というように間隔をあける）。特に曇雨天が続いた後、急激に晴れた時に日焼けしやすい。

(2) 生育が進むと地上部が重くなるため、曲がりが出る場合がある。ネット上げが遅れないようにし、支柱の間隔が離れている場合は、補強のために中間に杭を打つ。

(3) 萌芽初期に7～10日毎にダコニール1000、フルピカフロアブル等予防の薬剤散布を行う。病斑がひどい場合は、ポリオキシAL水溶剤で防除するが、生育後半は薬剤による葉の汚れに気をつける。

3 トルコギキョウの管理

(1) 定植後の灌水是活着を良好にし、初期生育を促進させるため根が張るまで十分灌水する。特に、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までに水分や肥料が少ないと切り花のボリュームが不足するため、積極的に灌水を行なう。

(2) 2度切り栽培は、草丈が10～20cm時に生育が良い茎を残す整枝を行なう。多く

茎を残すと切り花のボリュームが小さくなるので、残す茎数は、株当たり2本程度とする。

- (3) トルコギキョウは根張りが悪いと上葉が小さくなる「うらごけ」がおこる。圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施用する。特に春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (4) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）1.0mS以上と高い場合に多く見られる。定植前に土壤調査を行い、ECが高い場合は、水をかけ流したり、表土5cm程度を削りとり、塩類を除去するとよい。
- (5) 土壤酸度（pH）が低い時も同様な障害が発生する。土壤酸度はpH6.5前後がよく、酸性土壤ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。低pHでは薄い石灰水（苦土石灰などの石灰資材を100g/水10ℓに溶かす）10ℓを3㎡に土壤施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (6) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。過湿にならないように管理して、丈夫に育てる。発病株は抜取り焼却する。
- (7) 葉先枯れ対策には、日中に換気を十分行い、軟弱徒長気味の生育をさせない。また、雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいので、雨や曇天の日は、通風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、例年発生の多い品種では、カルシウム剤の葉面散布を定植1か月後から1週間ごとに行うとよい。

4 促成スイセンの球根掘り取りと球根の貯蔵前処理

- (1) 灰色かび病等で茎葉の枯れ上りが激しい場合は、ゲッター水和剤（花き類で登録ある薬剤）で防除する。球根掘り取りは、枯れ上がった茎葉が約50%となる5月15日以降を目安に実施する（写真1）。
- (2) 掘り取った球根の乾燥は、高温処理を開始するまでに、球根の表皮が親指の腹で簡単にむける程度まで球根を乾燥させる。乾燥方法は、風通しのよい場所で、陰干しする（写真2）。直射日光があたると火傷状に傷が残り、腐敗の原因となるため、注意する。球根は高温とならないようにする。



写真 1：水仙掘り上げ可能時期。葉の枯れ上がり 1/2 程度

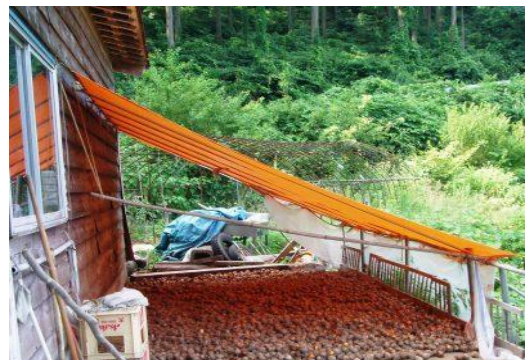


写真 2：球根を乾燥させるには直射日光を避けて、陰干しを行う。